

日本女性の世代間援助における長期的互酬性  
——「消費生活に関するパネル調査」データの分析から

韓 仁熙 (東京大学大学院)

1. 背景と目的

本研究では、日本の世代間関係において、成人子が過去に親から受けた援助を数年後に返すという長期的互酬性が成り立っているのかを検討する。成人子と親はライフコースにわたって互いに支え合う相互依存的なアクターであり、従来の研究も親子間の援助の授受を長期的な視点から捉え、親が子に提供した援助は後で親が必要な時期に返礼されると論じている (Antonucci and Jackson 1990; 春日井 1997)。しかし、日本において長期的互酬性を経験的データで実証した研究は乏しく、成人子が親から受けた援助に対して比較的短期間のうちに返すという短期的互酬性について実証した研究が多い (施ほか 2016; 星 2017 など)。

そこで、本研究は、子世代の女性の視点から、日本の成人女性と親の援助関係において長期的互酬性が成り立っているのかをパネル調査データを分析することで明らかにする。分析に際しては、(1)親の年齢が高くなると親に経済的・世話的援助を提供しやすくなるという利他主義仮説、(2)過去に親から経済的援助を受けたことは、加齢に応じて親に経済的・世話的援助を行う傾向をさらに高めるという長期的互酬性仮説、(3)将来親から相続を受けられると期待することは現在の親への援助を促すという相続期待仮説を検証する。

2. データと方法

本分析では「消費生活に関するパネル調査」の1993~2015年 (wave1~23) のデータを用いる。従属変数は、親への経済的援助と親への世話的援助 (家事、介護、訪問などの世話) であり、いずれも現在している場合を1とする2値変数である。分析には、個人間の異質性を取り除く固定効果ロジットモデルを使用する。

3. 主要結果と考察

第1に、親の加齢は娘による親への経済的・世話的援助を促す要因として機能していた。このことは、加齢による身体機能の低下や社会的ネットワークの縮小といった親のニーズに応じて親を援助するという利他主義が、世代間援助の動機として働くことを示唆している。第2に、過去に親から受けた経済的援助に対して経済的援助で返すという同形的かつ長期的互酬性が成り立っていることが示唆された。この結果は、長期的互酬性の動機と利他的な動機は重なり合って親に経済的援助を提供する娘の動機を構成していることを意味する。第3に、親から相続を受けられると期待することは親への経済的・世話的援助を高めており、相続の対価の前払いとして娘が経済的・時間的資源を提供するという、時間のズレを伴った交換が成立することが示唆された。

4. 参考文献

Antonucci, Toni C. and James S. Jackson, 1990, "The Role of Reciprocity in Social Support," Barbara R. Sarason, Irwin G.

Sarason and Gregory R. Pierce eds., *Social Support: An International View*, New York: John Wiley & Sons, 173-98.

星敦士, 2017, 「成人子から親に対するサポートはどのように決まるのか—第五回全国家庭動向調査を用いた世代間支援関係の検討」『社会学研究』99: 57-84.

春日井典子, 1997, 『ライフコースと親子関係』行路社.

施利平・金貞任・稲葉昭英・保田時男, 2016, 「親への援助のパターンとその変化」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族1999-2009—全国家族調査「NFRJ」による計量社会学』東京大学出版会, 219-33.

【付記】本稿の分析に際しては、慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターにより「消費生活に関するパネル調査 (JPSC) wave 1-23, 1993-2015」の個票データの提供を受けた。ここに記して感謝申し上げる。

(キーワード: 世代間援助、長期的互酬性、パネルデータ)